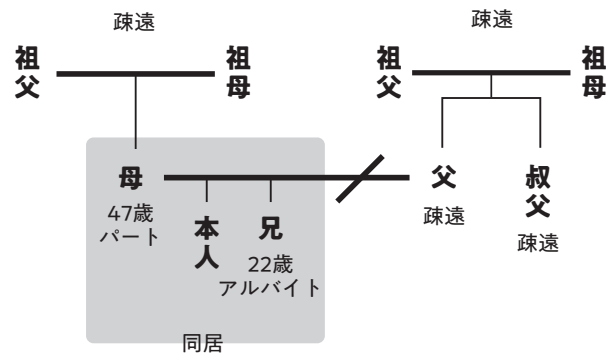


子ども期の逆境体験とその影響を考える

本人の
現在

ケースシート「ギターの子」

※このケースはすべて架空です。いかなる個人情報も含んでいません



本人の情報「ギターの子」

のぞみ（仮）

20 歳女性。宇治市在住。両親は幼少期に離婚しており、高校卒業後、バイトをしながら、母、兄と同居している。現在、自傷行為により、緊急搬送され精神科病棟で入院中。

状況 自傷行為で、病院へ救急搬送、入院へ

同居の母と兄に隠れて（日常的に）行っていた瀉血（針を刺して血を抜く）で止血が遅れ、気を失っていたところを兄に発見された。兄が救急車を呼び、夜に救急搬送された。病院へは兄が同行した。市販薬の過剰摂取を続けていたことも分かり、精神科病棟で入院となった。本人は自宅への退院を希望している。

対応 病院で医師・看護師が確認したことと対応

- 搬送後、止血対応し、本人の希死念慮が強いため、入院となる
- 精神科への受診歴なし
- 高校卒業後、本人は一人暮らしを目標にバイトをしていたが、体調にムラがあり、欠勤が多く、クビになったばかり
- 市販薬の過剰摂取は最近始めたらしい
- 母は救急搬送時に錯乱していて、兄が救急車を呼んだことを「近所に迷惑だ」などとなじって錯乱していた
- （兄によると）母はアル中とのこと
- ずいぶん前（恐らく中学生ごろ）からリストカットをしていた
- 小さなころから母は飲酒すると、兄やのぞみに暴力を振るうことが頻繁にあった
- この数年、以前から飲酒量の多かった母が昼間から飲酒するようになった

本人が考えていること、話さないこと

- これまでうまく家族に隠してきたのに、自傷行為がバレてしまって、実家に帰りたくないが、どうしようもないので、早く病院を出たい（母が自分の荷物を勝手に探ったりしないだろうか）
- 搬送された日の昼間にはいろいろな出来事があって、心の整理が追いついていない
 - 飲食店のバイトをクビになった。勤務中は必ず傷を隠していたのに、上司の男性との面談の際、「お母さんからもらった体は大切にしようがいいよ」と言われた
 - 高校生時代から SNS への弾き語りの投稿を続けてきたが、自宅で弾き語りのライブ配信をしていたら、酔って帰宅した母が乱入して中断した（※のぞみは音楽が好きで、ギターの弾き語り動画を頻繁に SNS へ投稿している）
- SNS には、心配される DM が届き続けているが、こんなことになってしまって、これからどうしたら良いか分からない。沈黙を続ければ続けるほど、人が離れていきそうで、混乱しているが、相談できるひとがない
- 私がおおごとになったことで、兄が暴力を振るわれているのではないかと
- 入院にかかるお金でまた何か責められるのではないだろうか

子ども期の逆境体験とその影響を考える

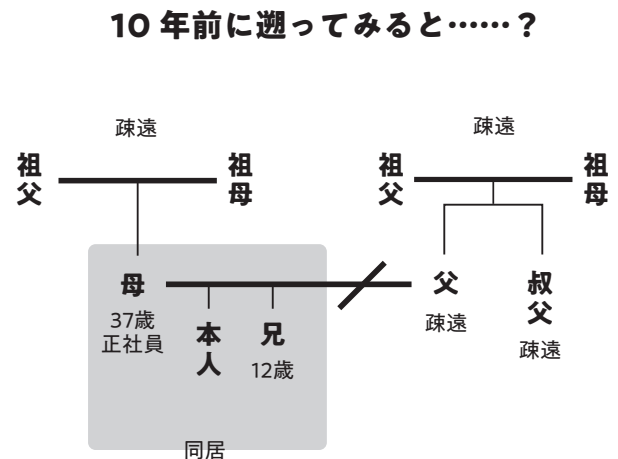
10 年前

ケースシート「ギターの子」

※このケースはすべて架空です。いかなる個人情報も含んでいません

「ギターの子」が 10 歳のころ

のぞみは 10 歳。宇治市在住。公立小学校に通っている。母、兄と同居している。半年前、10 歳になった日に、母が昔使っていたというアコースティックギターを誕生日プレゼントとしてもらった。うれしさと楽器の楽しさで、弾き語りがどんどん上達している。



家庭の状況 母は、飲酒が過ぎて、子どもに怒鳴りつけることがある

- 母は、メーカーの営業支援職。のぞみが 4 歳になる年に離婚した後、一度目の出産時に辞めた会社に正社員として復職した。営業職の帰りを待つことが多く、定時を大きく過ぎるのは日常的だった。
- 母は元々はアルコールを飲まなかったが、結婚生活と 2 人の育児のストレスから飲酒をはじめた。離婚と再就職を機に飲酒量が増えた。深酔いすると、家で子どもにもものを投げたり、ちょっとしたことで怒鳴ったりする。
- 近くのマンションに、兄の小学校の同級生家庭・竹内さん（女）が住んでいる。母と竹内さんは仲が良く、互いに気軽に連絡できる唯一の存在だった。まれにお互いの子どもがどちらかの家にご飯を食べにいくことがあった。母は何度か飲酒した状態で子どもを迎えにいったことがあり、竹内さんには飲酒を知られている。（竹内さんもシングルマザーで働いている。）
- まだはじめて半年ほどしか経たないのに、のぞみは学校の催しでギターの生演奏を担当することになった。クラスの友だちからも一目置かれていて、教師もほめている。（夜は家で演奏できないので、のぞみは休日に母に聴いてほしいと常に思っている。）担任はギターや歌の本格的なレッスンを受けてみてはどうかと保護者面談で薦めた。

母の視点 ストレスの多い職場環境と、長期的な心身の疲れ

- 子どもを理由に退勤できる職場環境ではない。「正規で復職させてあげたのだから、子どもがいるからってこれ以上ゆずれないよ」といった圧力を上司の言葉の端々から感じている。転職はリスクが多く、我慢するしかなかった。帰宅が遅くなるときは兄に連絡をするようにしているが、都度、自責の念が強かった。早く帰ってあげたいと思いながら、自責の念が強い日ほど、帰宅前に飲酒をしてしまう。
- 飲酒量が増えつづけており、最近の健康診断で肝臓の数値が良くないと指摘された。医師に飲酒習慣の有無を聞かれて、飲酒はしないと嘘をついたが、怪訝な顔をされた。職場の同僚には「アルコールだめなんです」と言っているのに、万が一医師からバレるようなことがあっては困ると考えていた。
- 産後から社会との関わりが極端に減り、交友関係は近所の竹内さんを除いて、東京在住の大学時代の親友だけだった。仕事の悩みや愚痴を話したかったが、相手の家庭に気がつかない、電話をすることはなかった。会いに行く機会もなかった。
- 離婚と復職の後に、再婚を考えたが、婚活をする時間がなかった。上司や同僚から男性を紹介されることもあったが、うまく予定をやりくりできないために、継続的な関係を築くことは難しかった。
- 車を所有していないこともあり、福知山にある実家とは離婚後に疎遠になっていた。仕事がない日は疲れ切っていて、家事や子どもたちの相手をするとうすぐに終わってしまう。実家に帰ったり連絡を取ったりする余裕すらないほどにずっと疲れている。